

三島由紀夫に関する病跡学的試論

Pathography of MISHIMA Yukio

中広 全延 NAKAHIRO Masanobu

1. はじめに

本研究は三島由紀夫に関する病跡学的研究の試みである。1970年11月25日の東京市ケ谷の自衛隊駐屯地における切腹自殺というある意味異常な最後の日の行動に焦点を当てるべく、彼の作品のいくつかを取り上げ、彼の自己愛をめぐって論じたい。三島由紀夫の全体的な病跡学的研究を現在計画中であるが、この小論はその最初の部分に位置づけられる。

筆者はこれまで指揮者のセルジュ・チェリビダッケ[1, 2]、カルロス・クライバー[2]、小澤征爾[3]、ヘルベルト・フォン・カラヤン[4, 5, 6]に関して病跡学的研究を行ってきた。カラヤンについては自己愛の視点から論じた。またジャン=ポール・サルトルに関しても、彼の自己愛をめぐって病跡学的考察を発表してきた[7, 8, 9, 10]。ゆえに本稿は、自己愛を考察の中心におくという点で、従来筆者の病跡学的研究の延長線上にある。

三島由紀夫は人並み外れて自己愛が強いことは明白だと思われる。実質的なデビュー作にあたる初の長編書き下ろし小説『仮面の告白』[11]が発表された時から、その自伝的内容に関して彼の自己愛は論じられてきた。例えば、新潮文庫版『仮面の告白』カバー裏には「…… “否定に呪われたナルシズム” を開示してみせた本書は、三島由紀夫の文学的出発をなすばかりでなく、その後の生涯と文学の全てを予見し包含した……」と解説されている。

三島由紀夫は論じ尽くされている観がある。文学者や文学研究者の説を精神医学用語に翻訳しただけに終わらないよう、従来言われてきたことにはあまり触れず、オリジナルなところを提出する。

2. 『不道德教育講座』

まず、三島由紀夫に関する一般的なイメージを確認しておこう。『不道德教育講座』[12]という彼の著作を取り上げる。『不道德教育講座』は、1958年「週刊明星」に連載され、翌年単行本が刊行された後、1967年文庫本となった。その新装版が入手可能である。

文庫本の巻末に奥野健男が、まことに当を得た紹介文を書いている。

「三島由紀夫に対する人々のイメージは、極端に分裂しているように思えます。小説など殆んど読んだことのない文学に無関心な人々は、三島由紀夫と言えば、テレビタレントや映画スターや歌手あるいは政治家と同じような有名人ということでその名を知っています。ボディビルで筋肉を鍛え、一に朝潮二に長島、三四がなくて五が三島などと言われる自慢

の胸毛をそよがせているプレイボーイ、写真でみると宮殿みたいに見える家に住み、映画に出たり、自分で映画をつくり切腹をやってみせたり、流行歌を唄ったり、裸体で写真のモデルになったり、同性愛者と見られたり、お神輿をかついだり、自衛隊に入り訓練したり、プライバシー裁判にひっかかったり、日本を代表する国際人として活躍したり、ファシズムめいた言説を弄したりする、ようするに派手なことが好きな人騒がせな、人気男、事件男さらにはスキャンダルメーカーというイメージを持っています。先日電車の中で『三島由紀夫氏ノーベル文学賞受賞か』という、週刊誌のつり広告を見て、学生たちが『三島はノーベル賞もらったら今度は何をやるだろうか』としやべりあっていました。ノーベル文学賞もらったら今度は何を書くだろうかと言われないうところにぼくは興味を感じました。

ところが一方三島由紀夫の小説や戯曲、そして評論を少しでも読んでいる人には三島と言えば現代日本文学の第一人者、世界の最先端に行く醇乎たる文学者というイメージを抱いています。……日本文学の今日の権威の象徴を、正統性を三島由紀夫の文学に感じているのです。……

……………

以上の文章は昭和四十二年（一九六七）に角川文庫本の解説として書いたものです。それから三年後、三島由紀夫は壮絶な最期を遂げました。……」

最後の部分は新装版に加筆されたものである。

「極端に分裂している」イメージの片方である「派手なことが好きな人騒がせな、人気男、事件男さらにはスキャンダルメーカー」「有名人」としての三島由紀夫がやっていることを文士の先生のお遊びと取る向きが、彼の生前にはあったように思う。つまりそれらは息抜きであり仮の姿である。真の姿はもう一方のイメージ「現代日本文学の第一人者」、「文学者」である。そういう捉え方があった。では「壮絶な最期」はどちらの三島由紀夫なのか。「壮絶な最期」に対しては理解不能に陥り、ここに来て返答に困るのではないか。

「どちらの……」という問いの立て方がそもそも悪い。三島由紀夫は分裂していない。統一的理解の鍵は自己愛である、と考えられる。

3. 「人に迷惑をかけて死ぬべし」

『不道德教育講座』の「人に迷惑をかけて死ぬべし」という章は、三島由紀夫に一読者から手紙が来たとの設定で始まる。引用しよう。

「ずいぶん前のことですが、或る青年からこんな手紙が来ました。

『三島由紀夫君（やれやれこの女学生好きのするペンネームよ）

僕達は心中する事にきめた。僕達は世にもたぐいまれな恋人同士さ。

……………

君に忠告する。……小説を書くのをやめろ。川端論かなにかで言っていたつまらない自己弁護はよせ。何も書くな。

……おそらく僕たちは君の小説の主人公に違いない。……』」

上記引用文中の「或る青年」はこれから恋人と心中するという。その人物が三島由紀夫に「小説を書くのをやめろ。川端論かなにかで言っていたつまらない自己弁護はよせ。何も書くな」と言っている。「おそらく僕たちは君の小説の主人公に違いない」とも言っている。「或る青年」が「おそらく僕たちは君の小説の主人公に違いない」ならば、その発言はおそらく三島由紀夫の内なる声を代弁しているに違いない。すると三島由紀夫が三島由紀夫に「小説を書くのをやめろ」「何も書くな」と命じていることになる。自分自身への引退勧告である。

死ぬ者たちの心の中を、三島由紀夫は次のように空想する。

「……近く心中するわれわれだと思つて、そぞろに特権的地位を感じて、行人の誰もがバカに見え、自分より数等低いところをうろついている人間のように思われてくる」

これは傲慢である。自己を誇大に評価している。心中あるいは自殺する人がすべてこう思う、と筆者には考えにくい。もっと謙虚な人もいると思う。しかし三島由紀夫は、もし自分が心中か自殺するとなったら、「特権的地位を感じて、行人の誰もがバカに見え、……」となるに違いない、と予想しているのではないか。それは、死ぬ人間は生きる人間よりエライ、という考え方である。死ぬ人間の自己愛である。

上の続きを引用する。

「どうせ死ぬんなら、盛大に死にたい。……あと三、四十年社会にお世話になる代りに、一どきに社会に迷惑をかけてやりたい。……」

……こう考えるうちに、二人の考え方はだんだん他人のほうへ社会のほうへ向いて来る。ただの心中や自殺が、だんだん社会への呼びかけに変ってくる。……

……………

『死ぬときには道づれに、五、六人殺してから死んでやろう』

こうして自分の死を最高の自己弁護の楯に使って、他人に迷惑をできるだけかけて死んでやれと思ひ出すと、自殺というものはもともと一種の自己目的の筈ですから、自殺の意義がだんだんうすれて来て、それが途方もない大きな対社会的行為になって来て、考えるだけでオックウになってしまう。

……………

だから、どうせ死ぬことを考えるなら威勢のいい死に方を考えなさい。できるだけ人に迷惑をかけて派手にやるつもりになりなさい。これが私の自殺防止法であります」

おそらく彼の自決の数年後、初めてこれを読んだ時、三島由紀夫の最期が前もって書いてあるじゃないか！と筆者は衝撃を受けた。

三島由紀夫がこれを書いたのは1958年、33歳のときである。その時点では「これが私の自殺防止法であります」と、「できるだけ人に迷惑をかけて派手にやるつもり」で「威勢のいい死に方」を考えるのは自殺防止のための思考実験だとしている。ところがそこから「防止」と「実験」がとれて、自殺のための思考となる。それが現実化する。

1958年から12年後の未来を知る者には、三島由紀夫は未来を予言していたように読める。

4. 『花ざかりの森・憂国 一自選短編集一』

新潮文庫にある三島由紀夫自選短編集『花ざかりの森・憂国』[13]の巻末に彼自身が解説を書いている。

1941年16歳のとき書かれた『花ざかりの森』は才能の早熟ぶりを示す作品としてよく引き合いに出されるが、解説には「因みに言うが、本短編集の題名をどうしても『花ざかりの森』としたい出版社の意向によって、私はやむなくこれを選んだ」とある。「『花ざかりの森』を、これ（『中世に於ける一殺人常習者の遺せる哲学的日記の抜萃』：引用者註）と比べて、私はもはや愛さない」とまで彼は言う。

この解説は昭和43年（1968年）9月と日付がある。最後の作品となった『豊饒の海』の第三巻『暁の寺』が同年8月連載開始されている。書かれた時期を考慮すると、解説の内容は彼の最終的な考えだった、又はそれにかなり近い、としてよさそうである。そこに最後の日の行動に関するヒントを探す価値はありそうだ。

『花ざかりの森』を「もはや愛さない」のに対し、同自選短編集に収録されている「『詩を書く少年』と『海と夕焼』と『憂国』の三編は、一見単なる物語の体裁の下に、私にとってもっとも切実な問題を秘めたものであり、……この三編は私がどうしても書いておかなければならなかったものである」とされる。この三編に三島由紀夫の秘密が隠されているということか。読みようによっては秘密どころか明々白々に書かれていると見えるのだが。

5. 『詩を書く少年』

太宰治や三島由紀夫は老眼鏡や入れ歯をつけた自分を想像するだに耐え得ないと、それが現実となる前に死んだ。こう精神科医の頼藤和寛は言う（私信）。これはわかりよい説明だ。

『詩を書く少年』から、いくつか引用しよう。

「彼（主人公の少年：引用者註）は世界文学大辞典の浪漫派の詩人たちの項が好きだった。かれらの肖像は、決してもじゃもじゃな髭などを生やして、みんな若くて美しかったからである。

彼は詩人の薄命に興味を抱いた。詩人は早く死ななくてはならない。夭折するにしても、十五歳の彼はまだ先が長かったから、こんな数学的な安心感から、少年は幸福な気持で夭折について考えた」

「ゲーテもシラーもまだ読んだことはなかった。しかし肖像は知っていた。『ゲーテなんていやだ。あれはおじいさんだもの。シラーは若い。僕はシラーのほうが好きだ』」

「僕が何らかの醜さに目ざめることがあるだろうか？ 少年はそういうことを考えてみもしなければ、予感してみもしなかった。たとえばゲーテがやがてそれに襲われ、久しくそ

れに耐えた老年というもの。そんなものが彼の上に訪れる筈はなかった」

三島由紀夫は前項で触れた自選短編集巻末の解説で「『詩を書く少年』には、少年時代の私と言葉（観念）との関係が語られており、私の文学の出発点の、わがままな、しかし宿命的な成立ちが語られている」と言う。するとこの短編の主人公の少年は著者自身である。

この解説を書いた1968年（昭和43年）、彼は43歳である（因みに昭和の年数と彼の年齢は一致する）。小説の主人公は十五歳で「まだ先が長かったから、こんな数学的な安心感から、少年は幸福な気持で夭折について考えた」。三島由紀夫のほうは「数学的な安心感」を持ってない年齢に達していた。もはやのんびりと「幸福な気持で夭折について」考える時間的余裕がなかった。彼は「ゲーテがやがてそれに襲われ、久しくそれに耐えた老年という」醜さに目ざめる。十五歳の少年に「そんなものが彼の上に訪れる筈はなかった」が、43歳の三島由紀夫には訪れようとしていた。「詩人は早く死ななくてはならない」にもかかわらず。

DSM-IV-TR [14]は「自己愛性人格障害をもつ人は、加齢とともに避けられない肉体的、職業的限界の出現に適応することが特に困難である」としている。DSM流には、三島由紀夫は加齢とともに避けられない肉体的限界の出現に適応できなかった、と言える。いや、適応する気が皆目なかった、と言うほうが正しいか。

生前、彼がノーベル文学賞候補に挙がっていることは報道されていた。川端康成が日本人初のノーベル文学賞を1968年受賞したとき、そのニュースを聞いて三島由紀夫は日本人にはノーベル文学賞は当分まわってこないと半ば絶望した、と伝えられる。世界には多数の言語があり、どれかひとつにノーベル文学賞は偏らないよう選考されている、と言われるので、日本人が短期間に続けて受賞する可能性は低い（と彼は考えた）。川端康成がノーベル文学賞受賞時69歳、そのとき三島由紀夫は43歳であった。彼は川端康成のような老境まで待てなかった。

巷には、若さと健康は美德である、との考え方があつた。一見もつともだが裏返すと、老いと病気は悪徳ということになる。三島由紀夫はその「老い」という悪徳をある種強引な方法で退けた、とも言える。

上で述べたわかりやすい頼藤和寛説で終わればいいのだが、『詩を書く少年』にはややわかりにくい解答も用意されている。『詩を書く少年』から、また引用する。

「美しいものを作る人間が醜いなどということはありえない、と少年は頑固に考えたが、その裏のもう一つのもっと重要な命題は、ついぞ頭に浮ばなかった。すなわち、美しい人間がその上美しいものを作ったりする必要があるか、という命題である」

自分は「美しいものを作る人間」である、美しい文学作品を作る人間である、と三島由紀夫は頑固に考えていたはずである。その人間が「醜いなどということはありえない」ゆえに美しくあらねばならない。彼はボディビルに励み肉体美を手に入れた。そして自分は美しいと自己愛を満たした。ところがさらに先に進むと「美しい人間がその上美しいもの

を作ったりする必要があるか」と矛盾にぶち当たる。突き詰めていくと矛盾するのだろう。

彼は、美しい人間がその上美しいものを作ったりする必要はない、と結論して矛盾を解決しようとしたのではないか。美しい人間である三島由紀夫が、その上美しい文学作品を作ったりする必要はない。つまり執筆活動停止、三島由紀夫の引退である。『不道德教育講座』に登場した三島由紀夫の小説の主人公と自称する青年も、彼に引退勧告をしていた。書くことをやめるという考えは、ずっと頭の中にあったようだ。

6. 『海と夕焼』

「数ある三島由紀夫の小説の中で、私が一番好きなのは、『海と夕焼』という短篇である」と梅原猛[15]は言う。

「……この短篇（『海と夕焼』：引用者註）は、三島由紀夫という詩人の最も根源的な内面の秘密を語るものであるように、私（梅原猛：引用者註）には思われる。

三島由紀夫は「奇蹟」なしには人生を生きるに耐え得ない人間であった。その背後には、おそらくは彼の不幸な幼時体験があらう」[15]

三島由紀夫自身による『海と夕焼』の解説を見てみよう。

「『海と夕焼』は、奇蹟の到来を信じながらそれが来なかったという不思議、いや、奇蹟自体よりもさらにふしぎな不思議という主題を、凝縮して示そうと思ったものである。この主題はおそらく私の一生を貫く主題になるものだ。

……奇蹟待望が自分にとって不可避なことと、同時にそれが不可能なこととは、実は『詩を書く少年』の年齢のころから、明らかに自覚されていた筈なのだ」

ここだけ引用すると文意がわかりにくいだろうから筆者が解説を加えると、神が起こす奇蹟は不思議なものだがそれ以上に不思議なことがあって、それは来ると信じて疑わなかった奇蹟が来なかったことである、と言っているのである（『海と夕焼』の主人公が信じたのはキリスト教の神だった）。だがそれは要するに、奇蹟が来ると信じたら奇蹟は来るのが当然で来ないほうが不思議、ということにならないか。考えようによっては、これは傲慢である。その不思議が「おそらく私の一生を貫く主題になるものだ」では、傲慢が一生を貫きかねない。いくら信じても奇蹟が来なかったのは、それが神の意向だったからであり、その神の意図を人間は到底うかがい知ることができない、とキルケゴールなら言うのではないか。

三島由紀夫は奇蹟の到来の不可能性を自覚しているが「奇蹟待望が自分にとって不可避」という。NPDの診断基準項目(2)に「限りない成功、権力、才気、美しさ、あるいは理想的な愛の空想にとらわれている」とある[14]。彼の「奇蹟待望」は奇蹟の到来という「限りない成功の空想にとらわれている」ことであるとするならば、この項目(2)に該当する。ここでDSMを持ち出したのは、自己愛を指摘するためである。「傲慢」も診断基準項目(9)にある[14]。

三島由紀夫の「奇蹟待望」は、NPDという病気の診断基準に該当するからと言って、

マイナスにしかならないわけではない。「奇蹟待望」は彼の創作の原動力であった。カラヤンにおいて自己愛はプラスの価値を持ち得た[6]。三島由紀夫も同様である。

『海と夕焼』は美しい短編である。その裏面に自己愛が控えている。

梅原猛の簡潔な三島由紀夫論は次の文で閉じる。

「私は生前には彼の日本観を厳しく批判したが、今は私と同年のこの『天才』に、強い同情を感じている」[15]

7. 『憂国』

「『憂国』は、物語自体は単なる二・二六事件外伝であるが、ここに描かれた愛と死の光景、エロスと大義との完全な融合と相乗作用は、私がこの人生に期待する唯一の至福であると云ってよい。しかし、悲しいことに、このような至福は、ついに書物の紙の上にはしか実現されえないのかもしれない、それならそれで、私は小説家として、『憂国』一編を書きえたことを以て、満足すべきかもしれない。かつて私は、『もし、忙しい人が、三島の小説の中から一編だけ、三島のよいところ悪いところすべてを凝縮したエキスのような小説を読みたいと求めたら、『憂国』の一編を読んでもらえばよい』と書いたことがあるが、この気持には今も変りはない」

この著者自身による解説を見ても、『憂国』が一番のお気に入りの小説だったことがわかる。制作・監督・脚本・主演を自らおこない映画化したことから、それはうかがえよう。

上の解説では「愛と死の光景、エロスと大義との完全な融合と相乗作用」は、小説の中だけでしか「実現されえないのかもしれない」、それで以て「満足すべきかもしれない」と言っていたのだが、結局、小説や映画という虚構の世界だけでは満足しきれず、現実に行き届いて満足しようということになったのだと思う。三島由紀夫にとっては、自衛隊員に決起を促す演説をし檄文を配り割腹自殺することが、「愛と死の光景、エロスと大義との完全な融合と相乗作用」であり、「私（三島由紀夫：引用者註）がこの人生に期待する唯一の至福である」と筆者は想像する。そう想像しないと、最後の日の行動が理解できない。

自衛隊の決起とはつまり軍事クーデターであり、二・二六事件の青年将校たちの行動と同じである。三島由紀夫は切腹するが、二・二六事件という軍事クーデターに参加できなかった『憂国』の主人公、武山信二中尉も切腹する。そう考えると三島由紀夫はあの日に、二・二六事件の青年将校と『憂国』の主人公、各々の行為を一度にしたことになる。彼にとって、極めて贅沢な一日、生涯最高の日だったにちがいない。

ここで小説『憂国』における自己愛を指摘しておきたい。

まずは主人公の中尉と新婚間もないその妻、麗子が、共に死ぬことを約束したときの、二人の心理である。

「喜びはあまり自然にお互いの胸に湧き上ったので、見交わした顔が自然に微笑した。麗子は新婚の夜が再び訪れたような気がした。

目の前には苦痛も死もなく、自由な、ひろびろとした野がひろがるように思われた」
「二人が死を決めたときのあの喜びに、いささかも不純なものがないことに中尉は自信があった。……二人が目を見交わして、お互いの目のなかに正当な死を見出したとき、ふたたび彼らは何者も破ることのできない鉄壁に包まれ、他人の一指も触れることのできない美と正義に鎧われたのを感じたのである」

ここには、死ぬ者たちが歓喜に包まれ清々しい気分浸っている様子が、描写されている。さらに、二人が余人には到底侵入できない所にいると感じた、とされる。しかしそれは、前述の『不道德教育講座』にあった「……近く心中するわれわれだと思つと、そぞろに特権的地位を感じて、行人の誰もがバカに見え、自分より数等低いところをうろついている人間のように思われてくる」という心理に通ずるのではないか。普通に平凡に生きている人間はダメで、心中するわれわれはエライ、という考え方である。『不道德教育講座』と違い『憂国』には、生きる人間はバカだ、とは書かれていないが、死ぬ人間はエライ、と読めるのではないか。死ぬ人間の自己愛である。

そう思って読むと、次のような表現もある。

「窓の外に自動車の音がする。道の片側に残る雪を蹴立てるタイヤのきしみがきこえる。近くの塀にクラクションが反響する。……そういう音をきいていると、あいかわらず忙しく往来している社会の海の中に、ここだけは孤島のように屹立して感じられる。自分が憂える国は、この家のまわりに大きく雑然とひろがっている」

心中する者の家は特別な所である、とこの文は言っている。物語の時代設定を取り外し三島由紀夫が生き残った戦後に時間を移すと、自動車は経済活動を象徴し、金儲けに「あいかわらず忙しく往来している社会の海の中に」死ぬ者たちは特権的な場所を占める、と解釈できそうだ。彼はそこを「魂の最前線」と呼ぶ。

ところで『憂国』の終わりには「一九六〇、一〇、一六」と日付が記されている。『豊饒の海』の第四巻『天人五衰』の末尾に「「豊饒の海」完。昭和四十五年十一月二十五日」[16]とあるが、日付をもつ作品は稀なので、それはお気に入りの小説というしるしだろうか。書き終えたときの満足感を忘れないため、日付を記録したのだろうか。

『憂国』は死ぬ人間の自己愛が描かれている。そこには三島由紀夫がストレートに出ている、と感じられる。

8. おわりに

本稿では、三島由紀夫の作品の内『不道德教育講座』『詩を書く少年』『海と夕焼』『憂国』を取り上げ、彼の最後の日の行動を自己愛の観点から解明することを試みた。

『詩を書く少年』『海と夕焼』『憂国』の三篇は彼自身が自選集に入れた自信作であり、『憂国』にいたっては一番のお気に入りの小説である。これに対して『不道德教育講座』は一般に彼の代表作とは到底考えられていないものであり、いわば軽い雑文の類である。しかし、その雑文に彼の本音が書かれているように思われる。この軽そうなものに重大な

ことが書かれているのは、やはり根っから真面目な彼がすべての著作に真剣勝負だったからであろう。

『不道德教育講座』にある「……近く心中するわれわれだと思えば、そぞろに特権的地位を感じて、行人の誰もがバカに見え、自分より数等低いところをうろついている人間のようにならされてくる」という文は、死ぬ人間の傲慢さを見事に言い表している。それは、死ぬ人間は生きる人間よりエライ、という考え方である。死ぬ人間の自己愛である。

おわりに結論をまとめると次のようになろう。

三島由紀夫の最後の日の行動は、死ぬ者は価値が高い、という死の自己愛に突き動かされたものではなかったか。

文献

- [1] 中広全延：「セルジュ・チェリビダッケ、その関係の様式」日本病跡学雑誌 60 ; 73-81, 2000
- [2] 中広全延：「セルジュ・チェリビダッケとカルロス・クライバーの病跡学的比較検討」夙川学院短期大学研究紀要 26 ; 51-63, 2002
- [3] 中広全延：「小澤征爾、24 歳の「ホームシックという奇妙な病気」について」日本病跡学雑誌 62 ; 103, 2001
- [4] 中広全延：「自己愛性人格障害の診断基準の有効性について、指揮者フォン・カラヤンをめぐって」精神神経学雑誌 106 ; 304-310, 2004
- [5] 中広全延：「カラヤンの閉じた目」日本病跡学雑誌 70 ; 60-69, 2005
- [6] 中広全延：『カラヤンはなぜ目を閉じるのか——精神科医から診た“自己愛”』新潮社 2008
- [7] 中広全延：「サルトルと視覚」日本病跡学雑誌 67 ; 91, 2004
- [8] 中広全延：「サルトルのメスカリン事件」日本病跡学雑誌 69 ; 85, 2005
- [9] 中広全延：「サルトルの病跡学的研究（その3）、ミシェル・フーコーとの関連で」日本病跡学雑誌 71 ; 95-96, 2006
- [10] 中広全延：「ジャン=ポール・サルトルに関する病跡学的試論 ——いわゆる「メスカリン事件」をめぐって自己愛の視点から——」夙川学院短期大学研究紀要 40 ; 33-50, 2011
- [11] 三島由紀夫：『仮面の告白』新潮文庫 1950, 2003 改版
- [12] 三島由紀夫：『不道德教育講座』角川文庫 1967, 2003 新装版
- [13] 三島由紀夫：『花ざかりの森・憂国 —自選短編集—』新潮文庫 1968, 1992 改版
- [14] American Psychiatric Association: Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision; DSM- IV -TR. American Psychiatric Association, Washington D.C., 2000. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 訳：『DSM-IV-TR

精神疾患の診断・統計マニュアル』 医学書院 2002)

[15] 梅原猛：『百人一語』新潮文庫 1996

[16] 三島由紀夫：『天人五衰（豊饒の海・第四巻）』新潮文庫 1977, 2003 改版